

#### 4・近世後期における

##### 「家」の性格の一考察

吉村はぎの（東京教育大学）

本報告は、近世後期になって進展する商品経済、貨幣経済の村落への浸透の過程で「家」の変化する側面をとりあげて、改めてこの期の「家」の性格を問うという試みである。

これまで近世の家については各方面から示唆され、多くの実証的分析もなされていながら、家の存在形態にかかわる、村落を構成する末端の家々までを含めた政治的支配構造の変化という問題としては十分に注意がはられていなかったように思われる。筆者はこの点を主要な課題とし、本報告はその一環として、信州更級郡大塚村を事例に近世後期についての様相を述べてみたいと思う。

近世全期を通じての分家過程は、本家を中心として分家群による同族団を形成せしめ、村内に一定の社会的地位を占めてゆくという形態で現われる。それは漸時的に進行し、従来の研究により明らかにされているように、特質ある結合原則をもって村落構造を特徴づけるのである。

とはいえ分家過程の必然性あるいは分家の性格とは超時代的に一律に理解できるものではない。この点大石慎三郎氏によって、信州五郎矢衛新田の村落構造と対比して該村における寛文期の画期性が指摘されたことは注目すべきことといえるであろう。また視角は異

にするが、大竹秀男氏によって検出された点も重要であると考える。これらを考慮して、村落の歴史研究を筆者なりに整理してみれば、村落構造論という観点から、種々の社会関係の様相を「△村落構造の集中的表現」の形態（蓮見音彦氏）として前者から区別して、後者を改めて問い返すという研究の方法が、近世についても意義をもつと考える。

本報告で問題とする点は第一に、村落の支配構造の変動を通じて、いわば本家分家関係として、あるいは同族団の社会的地位の優劣として成立した村落の身分階層秩序さらに生活規範までも、どのような変化を読みとることができるのか。第二にはその変動過程を下で担う新興勢力はいかなる「家」をもち、旧来の社会関係によるどのような規制下にあるのか。第三にはこれらの全般的過程で、本家分家関係の様態の変化、それに応じて家々は必然的にどのような結合原則を持つようになるのか、等々の点である。

大塚村では宝暦七年に東西の組分けが行われている。そこで兩組に混成した同族団は見られない。経緯は東組が西組を分立させるといふ形態をとるが、以降西組は一村落としての自立性を高めながら兩組はほぼ別個に展開していく。村落構造の形態は発足の頭初より差異をもって現われるが、そこにどのように同一の傾向を内在するかは、性格を変化させつつある「家」にも読みとることができるのである。

概略的にいって結論として、「家」を規定するのは、この期に至って本分家関係あるいは同族結合というより、村落構造の展開が自

ら体現する諸社会経済的要因であることが指摘できる。しかしそれは「家」の崩壊過程を示すものではない。性格の変化が看取できるということであるが、少くとも歴史過程に「家」を位置づける一端とはなるであろうと思う。

#### △分析▽

(一) 大塚村における支配構造の変動過程と「家」

(1) 「東西組分け」の分析

(2) 東組M家の分析

(二) 大塚村西組の「家」の動静

(1) 分家の性格

(2) 農民層分化の進展と「家」

(三) 近世後期大塚村における「家」の性格

(補) 「宗門改帳」と「五人組帳」における「家」